

自主協同学習論による大学授業の改革

A Study on Educational Improvement in Higher Education based on the Theory of Cooperative Collaboration in Classroom Learning

(2010年3月31日受理)

高旗正人

Masato Takahata

Key words : 自主協同学習論, 授業形態, 授業改革, 班役割, ノート指導, 授業の肯定的評価

論文の要旨

本稿は、大学授業の改革（改善）に対する自主協同学習論からの実践的提案である。従来の大学授業の改革は、そのほとんどが、教材提示法や教材提示技術の改善に限られていた。本改革は、教師と学生との授業過程におけるリーダーシップの交替による授業の改革を目的としている。教師の授業過程でのリーダーシップを一部後退させて、学生たちがリーダーシップを発揮することによって、授業を展開する。その過程をどのように展開したか。具体的に写真で示すことが目的である。さらに、そのような授業に対する学生からの評価を公開することで、この自主協同学習論による授業改善と評価のあり方を明示しようとした。

問題の所在

大学講義の改善が言われて久しい。アメリカなど外国で開発された講義形態や授業改善の成果について、かなりの数が報告されてきた。さらに、学生による大学の授業評価や学内のFDが日常化してるなかで、大学の講義自体は大きな変貌を遂げたと言えるであろうか。大幅な改善が見られ、学生の授業評価が高まったという報告は一部にとどまる。

なぜ大学の講義は改善が難しいのか。講義は、伝統的には、自ら研究していることを後進の学生に伝達するというのが趣旨であった。「研究と教育」が大学の本質といわれてきた。研究があってその伝達としての教育が第二義的にある、という構造である。研究の高度化と大学進学率の著しい増大の中で、大学は「教育と研究」の場と化した。教育が中心で研究は付随的な教員の仕事として位置づけられた。そのような中で、一教員の担当授業科目は多様化した。例えば、教育社会学の専攻である者

が、教育方法学、特別活動論、教育基礎論、教育社会学、程度の担当は常識化してきた。

講義のために必要なことは、教材理解、学習者理解、指導法という三点であろう。研究を伝達していた時代の講義者にとって、教材理解は問題なかった。現在は、この第一義的に求められる教材理解が大きな障害になっていると思われる。仮に、教育社会学を専攻する者が教育方法学の講義を担当すると言うことは、社会学者が教育思想の講義をするということである。学問研究の方法論的に対立する両講義を行うことは、かなり覚悟が必要である。学部学生に対する概論の講義であるとはいえ、方法論的対立の処理は一応無視しても新しい勉強を教育社会学者はしなければならない。もし仮に、教材理解が有る程度の水準に達していなければ、講義の形態を変革して新しい授業をつくることは困難ではないか。専攻外とはいえ、少なくとも、自ら担当する講義用の教科書を作るていどの、その分野の知識に精通していなければ独自の講義形態の開発はできるものではないであろう。

第二は学習者理解である。100人を超える学生を対象とする一週間一度の講義で学習者理解をどのようにして行うか、至難の業である。15回最後まで名前と顔とが一致しない学生がほとんどである。その学生をどのようにして理解するか。ごく一部の学生を代表者と見立てて、質問しその応答から全体を推察することしかできない。それと、講義室の雰囲気はこの質疑から有る程度つかめるかもしれない。積極的か消極的か意欲があるかないか、長年の経験的感覚を持ってすれば有る程度は理解できないこともない。他に、ノート提出、レポート、手記、メモなどの提出によって捉えられるが、それらは講義自体の方法に関しては、やはり直接的ではない。小中学校のように学級活動やホームルームが毎日あって、学習者とのあるていどの接触がある場合と大学の講義とは、授業改善の在り方は違ってくる。その結果、視聴覚教材の開発、その他の教育機器の開発導入で、大学の講義の改善はお茶を濁してきた、ように思われる。教材もわからない、対象としている学生もわからない状況で講義の改善ができるのはこの程度である。

第三の指導法の改善は、第一の教材理解と第二の学習者理解が基礎にあってはじめて可能になる。それがないところでは、従来通りのいわゆる知識伝達型の講義に終始せざるを得ない。それ以外の指導法を導入することなど考えられない。100人以上の学生によく講義内容が伝達できるように、教材提示装置を導入する。わかりやすいように、パワーポイントを使って、教材内容を具体化する。指導法改善としての取り組みは、ほとんど教材提示方法（ないしは用具）に限定されてしまう。

本稿では、このような大学の講義の現状の中で行った、拙担当の半期講義（「教育基礎論」「特別活動論」「教育社会学」）で行ってきた指導法「講義の自主協同化」について1年生後期「教育基礎論」を中心に報告する。

1. 自主協同化の概要

- ・受講生：2009年度後期「教育基礎論」の受講生は、男子15人、女子50人 合計 65人
- ・グループ編成：出席簿の順番に6－7名で編成。結果10班編成になった。
- ・グループ別の名簿をつくり、司会班に毎時間貸与し、

それによって司会班は授業を運営する。

- ・座席はグループ別に話し合いができる位置にとるようにする。教室が狭く6～7人が向き合う形にはなりにくい。
- ・グループは、発表班、司会班、質問班の三種類である。毎時間全員がいずれかの班役割を持っている。15回の授業時間で、少なくとも1回は、司会班と発表班を経験することになる。質問班は各回の授業の司会班及び発表班以外の残り全班である。どの班に質問があたるかは、その時間の司会班に裁量がまかされる。
- ・自主協同の授業形態の導入についての説明：なぜこのような授業を行うかを、次のように説明し、学生に納得してもらうことから始める。

「子ども学部」の学生は、そのほとんどが、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭をめざしている。世間一般に「先生」と呼ばれる職種である。この職場では独特のコミュニケーション能力が必要とされる。それは、説話、質問、応答、司会である。それらをトレーニングするためのカリキュラムとしていくつかの実習が計画されてはいる。しかしそれはあまりにも時間数が少ない。教育基礎論や特別活動論の私の授業では、そのようなコミュニケーション力を培うために、自主協同の授業形態を導入するのだ。」そのことを意識して教育実習・保育実習の事前訓練のつもりで積極的に活動してほしい旨説明する。

- ・授業の進め方について：前時に、講義担当者の助言によって司会者が次時の適当な分量を教科書のページで示し、発表班が認識したかどうかをしっかりと確認する。司会班とともに発表班を認識させるように「次回司会は何班です、挙手して下さい。」「次回の発表班は第何班です。挙手をして下さい」というように司会者に確認をとるようにさせる。
- ・学習方法についての指示：ノートのとり方を説明し、話し合いが中心になるから、ノートを取っておかないと、何も残らない恐れがあること。テストは、完全な個人を対象とした筆頭試験とすること、ノート持ち込み可等の条件を告げる。

2. 自主協同の授業展開例

本時：「教育基礎論」（2010年1月20日，11：00-12：

30）第14回目

1）教材・教具

教材：教材は、この分野でもっともポピュラーな教師養成研究会編『教育原理』である。

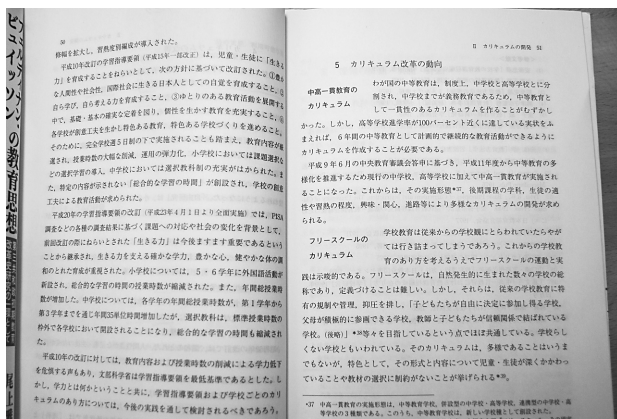


写真1

教育原理の教科書は筆者は何冊か執筆している。それらは分担執筆であり、自分が書いた章はもちろん教科書として使いやすい。しかし、他者が執筆した部分は、教科書として、深みと幅を持たせて講義することは至難の業である。教育原理や教育基礎論は大体入学直後の1年生を対象として開講される。教育系大学の学生が大学の講義を難しいと感じるのは、この教育原理（大学によって呼び名はいろいろである）である。その講義を行うための教科書の適当なものになかなか出くわさない。それでは自分で全部執筆すれば良いではないか、ということ

になるが、自分一人で執筆したものは、他人は使いにくいのでまず他からの購入はないであろう。となると、発行部数が少なくなるから出版社が出版を引き受けてくれない。たとえ引き受けてもらえても、定価がかなり高くなるので、教科書として使うとなると学生からクレームが来ることは必至である。

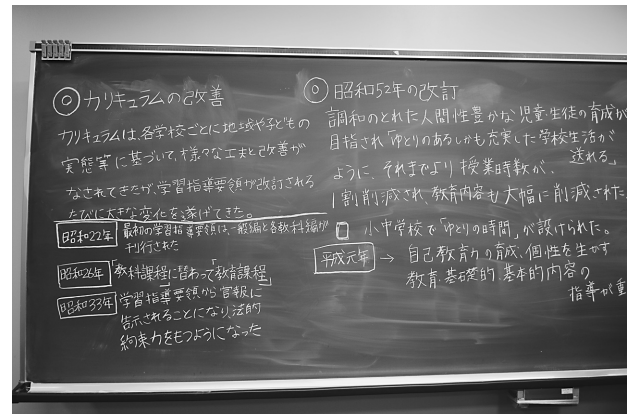
さらに、複数の執筆者からなる共著は、関係した人がみんなで使用するから発行部数も増やせる。従って、教科書の定価も安く設定できる。さらに、現代の教育学は、多様化しており、一人で全分野をカバーするだけの知識は持ち合わせない場合がほとんどである。このような諸般の事情によって、協同執筆というのが教科書の現実的なあり方である。現在、共同執筆の教育基礎論のテキストは多種類存在する。その中で、もっとも学生に買いやすく、執筆陣が確かであり、かつ伝統のあるものの一つが本書である。本書を選んだのは、比較的使いやすく、大切な教育学の概念が網羅されているためである。

本時の内容：教員養成研究会編『教育原理 十訂版』学芸図書、平成21年、49～52頁。4カリキュラムの改善、5カリキュラム改革の動向（写真1）。

司会班：5班，発表班：6班。

教具：教室に用意する教具には特別なものはない。発表は教卓前の黒板と移動用のホワイトボード2機である。

これらにはまず、発表班が分担して発表準備をするために使用する（写真2）。さらに、質疑応答の際に、司会係が発言された質問とそれへの解答を記す。



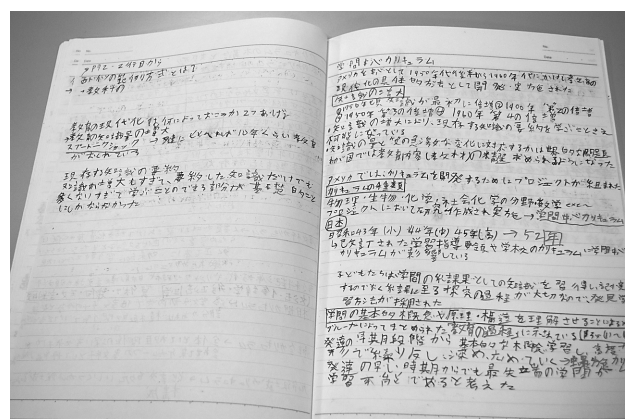
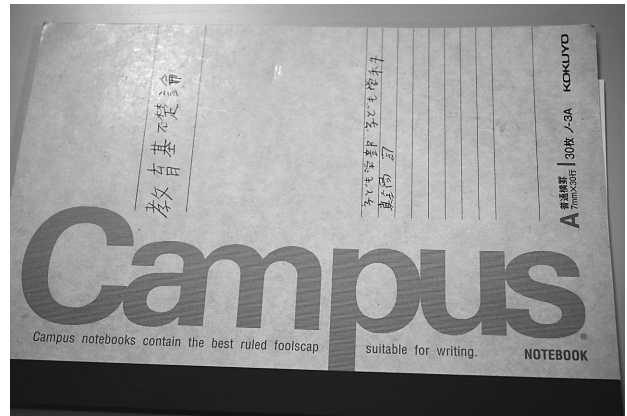
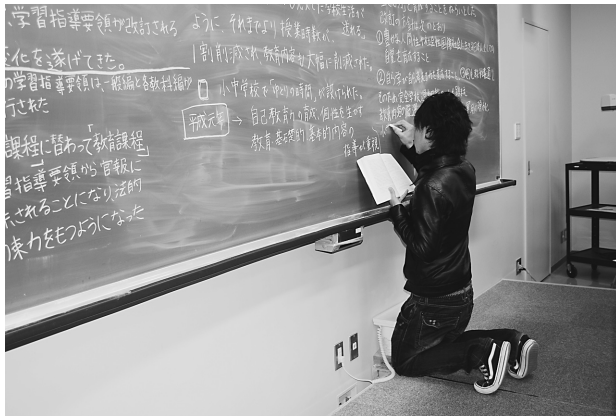


写真3



写真2

学生ノート：学生には必ずノートを用意させる。左のページは開けておく、自分の思いついたこと、疑問、参考文献などを書き込むこと、と指示してある。右側のページには発表係が板書しているものを書き写すこと、と指示しておく。書き写しながらわからない点や疑問点を洗い出して左のページに記す(写真3)。

2) 授業の過程

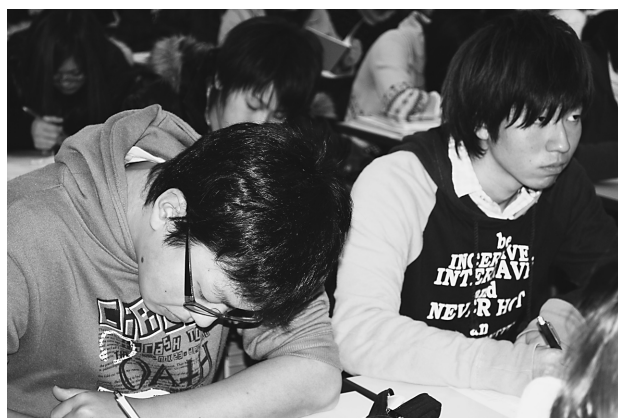
① 始業のチャイム前：発表係は前の黒板やホワイトボードを使って発表準備をしている。私も3分前ぐらいには教室に着くようにしている。学生はもっと早い。私が教室に入った頃にはかなり発表準備が出来上がっている(写真4)。





写真4

- ② チャイム：チャイムと同時に挨拶をして出欠を確認する。欠席はきわめて少ない。挨拶は「お願いします。」ということにしている。教師と学生、学生同士が協力し合って勉強するのだから。
- ③ 発表系の板書とその他発表系以外は自分のノートへの板書の写しが続く（写真5）。



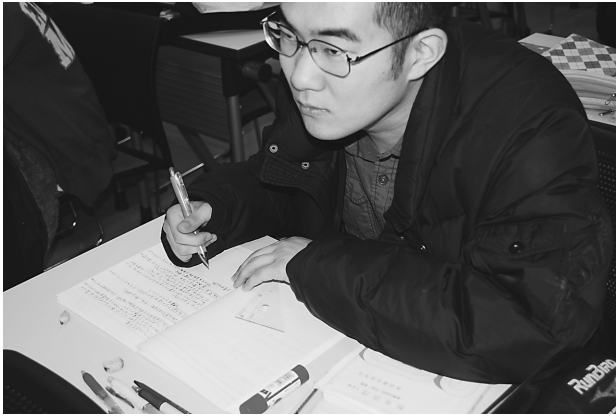


写真5

④ 発表準備が終了する時期を見計らって、司会班が、簡単に打ち合わせをして、司会を担当する者が2名、司会席に着席する。司会班の他の者は、質問を聞いて板書する役割を演じる（写真6）。

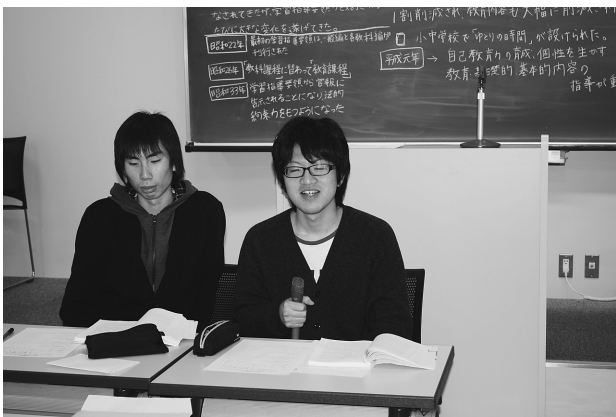


写真6

⑤ 「発表の準備ができたようなので、発表班は順次発

表をお願いします。まず、テキストの発表部分を読んで下さい。」という司会者の指示で、発表が始まる。

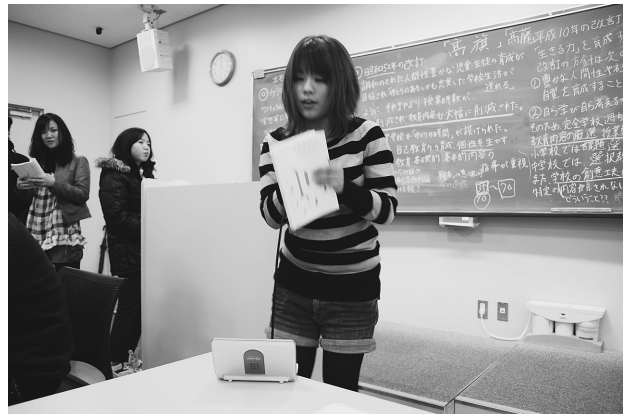


写真7

発表の区切りは約1頁程度を目安にしている。ひとりが1頁程度区切りのところまでを読み、その部分を2人くらいで分担して内容を板書によりながら解説という形で発表する（写真7, 8）。





写真9



写真8

- ⑥ 発表が終わると司会者は、「5分間程度時間をとります。質問事項を各班で話し合ってもらってください。」という指示をする（写真9）。

- ⑦ 発表に対して質疑が続く。司会者は、はじめは「〇〇班さん質問をお願いします。」といって班を指名していたが、それでは質問者が班の中で偏って、良く発言する者に集中することにもなりかねないので、「〇〇班の誰さん、質問をお願いします。」というように個人名を呼び上げることにした。それによって「パス」「もう少し後にして下さい」「ありません」が極端に少なくなった。

1年生の学生にとって、この『教育原理』のテキストはむずかしい。知らない用語が次々と出てくる。それらになれることが、この授業の一つの目標である。言葉自体が質問されることがかなりある。自分で調べれば解ることではあるが、発表者や私が授業中に答えることにしている。

- ⑧ 出された質問は、司会班が板書をする。

黒板の黄色のチョークが質問事項の板書である。ホワイトボードの方では赤色が使われることが多い（写真10）。



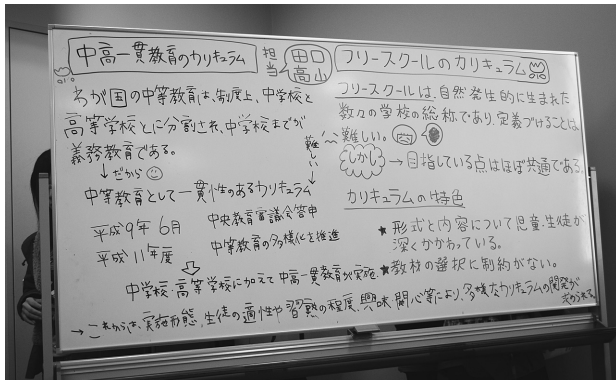


写真10

⑨ 質問が出されると解答しなければならない発表班は、集まって、解答を考え、答える (写真11)。

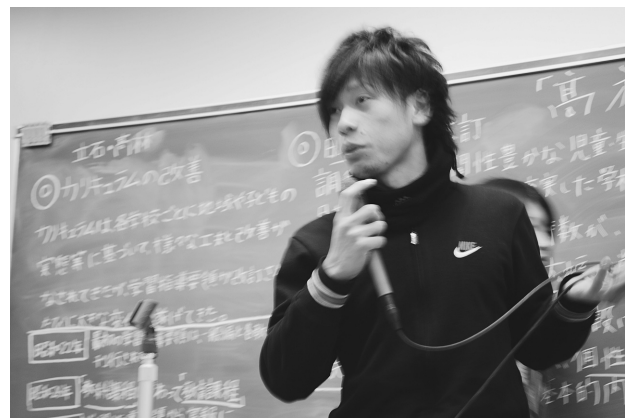


写真11



⑩ 解答に自信が持てないときは、私の所に聞きに来る発表系の学生もいる (写真12)。



写真12

⑪ 発表の学生に説明して、教室全体には学生から説明させる場合と私自身が出て、説明する場合とがある。(写真13は「やらせ」である。私が写真に写っていないことに気付いた学生が、「先生が前に出て、説明しているところを撮るから、やれ！やれ！」というから、そのようなポーズをとった。) もちろん、このような場面は日常的であり、かなりの時間をとって、講義をする場合もある。学生中心の授業であるとは云え、大切なところが、十分理解されていないと感じる場合は、説明を教師の方で行うことはきわめて重要である。

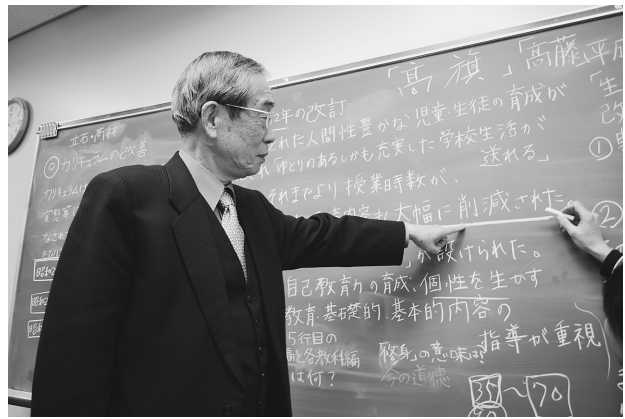
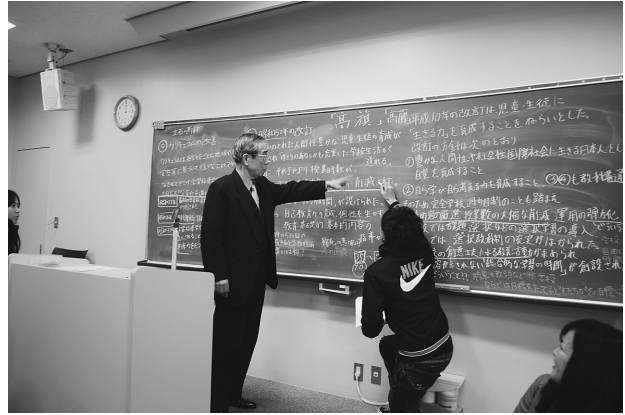


写真13

⑫ 他の学生は、質疑のやり取りを熱心に聞いている。また、自分のノートの左のページに、気のついたことをメモする(写真14)。



写真14

⑬ 何時も熱心に、私の指示に忠実にノートを取っているM君のノートである(写真15)。

たまたま彼の席が前の方であったため、撮らせてい

いただいた。

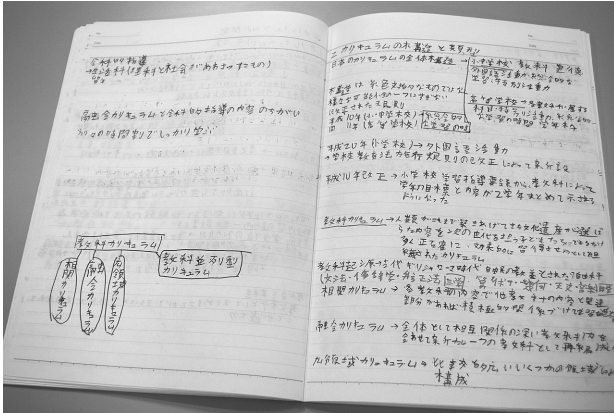


写真15

以上が、私の『教育基礎論』の授業過程の概要である。

授業のステップは「発表準備」－『「発表班による通読」－「説明的発表」－「グループシンキング」－「グループからの質問」－「発表班からの解答」－「教師からの補足説明」－「次時の学習内容の指示」－「発表班・司会班の指示」となる。』内の過程は90分内に2回程度行われるのが普通である。

3. 授業評価の視点

従来の授業評価の課題：学生による授業評価が大学の講義や演習に対してに実施されるようになって、10年くらいになる。前大学でそれを目の当たりにしたとき、あまり大きな意義を感じる事ができなかった。質問紙法による調査を研究の一部に取り入れていた経験からすると、大いに改善の余地のなる内容である。その後、同様なアンケート調査は、「行うことに意味がある」かのように惰性的に実施されて現在に至っている。そのアンケートの実施によって、日本の大学の授業において、何が変わり大学の授業が、改善されたという事実を知らない。授業中の声の大きさ、板書、資料配付の有無、学生の私語の注意の有無、教科書の適切さ、などの項目で学生が半年間の授業を評価し、それをコンピュータで処理して各教員に返してくる。平均点と比べて、あなたの講義はどうかというデータである。自由記述もごく一部の学生によって書かれているが、ほとんど見あたらない。データを見ると、どの授業も中間的な評価になっている

ことがほとんどである。学生も慣れたもので、学生の代表によって配布されるや一目散に評価票を完成させる。しかし、できてきた評価は、かなりあたっている部分もある。板書がダメだと思っていると、その項目は得点が低い、私語を注意しないでいると、授業の秩序維持に関する項目がよくない。私が思っている自己評価と学生の評価は合致している。それならば別にこのような事をしなくても、自己点検をしっかり行い自己評価をして、授業改善に取り組みばよい。その改善の方向と方法技術を定めることが重要かつむつかしい。この授業で、どのような学生を育てようとしているのか、今の学生が何を求めているのか、など、授業改善には教育の理念と学生の現状把握が必要である。

授業の肯定的評価：今の学生は、従来の伝統的な日本の大学生ではない。授業に対する態度においてもそれは言える。参加発信型と特徴付けられるであろう。講義を受け身の立ち場で聴くよりも、自分が意見を言う、質問をする、発表する事が得意である。この学生の特性を生かした授業形態をつくろうとまず考えた。その際特異な授業形態に対する学生の評価をもらうことは、新しい試みの方向性を見極めるために大切なことである。

その評価方法を、答案用紙に、試験問題と並べて「5. この授業を受けてよかったことについて書きなさい」という自由記述方式にした。なぜ、客観的な、授業の変更点についての評価をさせることなく、「よかったこと」に限定したのか。授業は教育である。試験も教育である。授業評価も教育という観点に立つとき、自分が受けた授業の欠点を探すよりは、よい点を探して、文章にしてみることが意味がある。答案用紙に試験問題と並列にあたかも採点対象になるかのようにおかれた、この肯定面のみを問う授業の肯定的評価は、バイアスがかかっており、授業の客観的評価にはなり得ない、といわれるかもしれない。しかし、学生からすれば、半年間15回受講した授業のよいところを一心に探すであろう。仮に、よいところが見つからなければ、そのような内容をつくって書かざるを得ない。しかし、授業のよいところを何とか見つけようとする努力、それを文章にする努力は、大学の授業に対する批判的視点だけでなく、肯定的評価の視点を養うことになるであろう。欠点は見つけやすいが、長所はなかなか見つけにくい。しかし、よい点を見つける目

を養い、自らの将来に生かすことこそ大切なことではないか。そのような考えに立って、あえて、授業の肯定的評価を取ることにした。

定期試験は、90分授業の15回目、最後の時間に普通の個人別の筆頭式の試験を行った。教科書の持ち込みは不許可、自分でつくったノート、期間中に提出して返却されたレポート類、テストの予想問題として事前に出しておいたものへの自分でつくった解答は持ち込んでよいことにした。

4. 自由記述に表れた学生の授業評価

・自分でまとめることの力が身についた。人の発表に耳を向け、自分の意見を言うこともできた。子どもについての深いつながりを学ぶことができた。自分で考える力もついた。先生、今までありがとうございました。

・班別に、発表、司会、質問と別れていて、自分自身が理解できていないことも明白にすることができたし、みんなの意見を聞き、また、自分の意見をみんなに伝えることができたので、とても充実感にあふれたまま、授業を毎回終えることができるのが楽しかったしとても良かった。普段の授業と違う形式なので、自分も授業に参加している！という気分が、どの授業よりも一番味わうことができた。

・この授業を受けて良かったことが何点かあります。一点目は教育についてです。教育というものは何であるかを知ることができたことです。教育の重要性や学習についても知ることができました。二点目はカリキュラムについてです。カリキュラムは様々な機能があることがしれて良かったと思います。

・長い文章を書くことについて、論文を書くことについてちょっと勉強できて良かった。教育の基礎についても学ぶことができ、いろんなことを学べて良かったと思った。

・今まで「学校教育＝勉強」だ、と思っていたが、教育といっても、昔は知育と訓育に別れていて、それぞれの役割があったことなど深く知れて良かった。また、人前に立って発表したりノートをまとめることでより深く理解できたと思う。

・この授業を受けて、自らが教科書を読んで内容を理解

し、それをみんなにわかりやすいようにまとめ、授業で発表するというやり方は、すごく自分の身につくものがたくさんあった。自分でやるからこそ、内容も理解しやすく、学びやすかった。生徒（学生）で授業を展開してやることは、すごく自分の学びのためにもなってよかった。

・教育の本当の意味やカリキュラムにもたくさんの種類があるなんて知らなかったのでおどろいたし、また、勉強にもなりました。じぶんたちで発表、発言するので毎回緊張感をもって授業ができたと思います。

・この授業のやり方は最初はよくわからなくてとまどってしまったけど、やってみるといつもより自分が考えることが増え内容が頭に入りやすかった。

・むつかしい文章をみんなにわかりやすくまとめたり、自分なりに考える力がついたと思う。内容はすごくむづかしかつたけれど授業はおもしろかった。

・この授業ではみんなが参加し、発言する。他の授業はただ先生の授業をもんもんとしているだけなので、みんなの意見を交換したり、相談したり、意見交換をして、みんなで分かり合う所で、授業に参加しない人がおらず、わからないところも、みんなの意見や先生の意見を聞くことで解決することができる。全員での授業がすてきだった。理解し合うことは、とても、必要で大切だとわかった。

・この授業では、発表班、司会班、質問班に分かれて行うものだった。最初はあまり好きじゃなかったけど、全体を巻き込んで最後まであきずにできるよい授業だった。発表班の時は教科書に書かれていている要点を見つける訓練になったし、司会班の時は、進行するスピードなどの訓練にもなっていたのでとても充実した授業だったと思う。

・この授業でさまざまな教育の知識が学べましたが一番よかったのが、自分たちで考えてまとめて発表する練習ができたことです。とてもいい経験になりました。

・この授業を受けて、本に書かれている文章の意図をきちんと理解する力が身についたと思います。また、自分たちで内容をまとめ、黒板に板書することで板書になることができました。司会は授業の進行をする際にとっても重要であることがわかりました。質問内容を考えることも、その質問に答えることもその文章がきちんと理解

できていなければできないということがわかり、理解する力が身につけられました。

・学習とは教科のことだけではないということがわかったのがよかった。

・この授業は学生が自分で考えまとめるので、自分で答えを導き出す力をつけることができる。先生が「この授業が楽しみ」とよく言うのでうれしかった。

・自分が授業をすることにより、指導力もついてくるし、どうやったら分かり易いかなど、質問に自ら答えるのはとても自分のためになると思いました。授業内容についてはとても深く教育について学ぶことができました。人の基本的なことまで学べてよかったです。今後絶対役に立つと思いました。

・この授業を受けてカリキュラムとは何か？カリキュラムにもたくさんあることがわかりました。人間か生きていくためには社会のこと、文化のことを知り、それを生活の中で学んでいかなければならないことに気がきました。発表形式だったので、人の前に出て司会をしたり意見を言うことになれました。ありがとうございました。

・最初は教科書に書かれている内容がむづかしく理解できず、いやな授業だと思っていました。しかし回を重ねるごとに少しずつですが、教科書の内容が理解できるようになりました。読解力、文章力のない私にはとてもためになる授業でした。また、教育について知識が深まったと思いました。

・どうして教育を受けなければいけないのか、人間が生きていくための力と教育はどう結びついているのか根本的なものからくわしく勉強することができてすごくよかった。また、話を聞くだけではなく、自分たち中心の授業をすることができたので話す力、聴く力が前よりたくさん身についたと感じた。

・この授業では、内容を読み取ってまとめる力を身につけられたことがよかった。最初はどのようにまとめればいいのかわからなかったけれど、みんなのまとめ方など見て少しは理解することができた。

・むづかしい言葉が多かったけれど、班のみんなと協力してまとめたり発表することができた。質問に答えることで考える力をつけることができた。教科書の内容の重点的などころを要約することで、どこが大事かわかるようになった。

・学生が主体となり進めていく授業は初めてで、とても新鮮でした。質問したり発表するので、より集中して授業に取り組みました。

・人生で初めてこんな授業をした。一番強く思ったのは大学っぽい勉強をしていると思った。実際に自分で教科書を読んで、自分なりに解読してみる。合っているととてもうれしい。違っていても、なぜちがったのか、くわしく先生が補足してくれる。あるいは他の学生が言うしてくれる。後期のこの授業で、まだまだだがとても力が入った。自分が得たものはとてもよかった。ありがとうございました。

・教育のあり方であったり、カリキュラムの構造を具体的に深く考える授業でした。とても頭を悩ませられたが、この授業で学んだことにより、どうして私たちは、勉強し、教育を受けなければならないかということがだんだん理解できるようになったところがよかったです。大学生になってこの授業を受けられたのも全部教育というものがあったからだ気づくことができました。

・長い文章をだらだらと読んでも頭に入ってこないけど、担当をきめて、わかりやすくまとめてくることで、要点などもすぐわかり、復習もとてもしやすかった。教育やカリキュラムなど、むづかしい言葉もいっぱい出てきて、わかりにくかったけれど疑問に思ったことを質問したりすることで、かみ砕いた説明をしてもらったので、疑問が解消されてとてもよかった。教育のことなど、知識が今まで以上に増えたので、とてもよかったし、これからももっと知識を増やしていきたいと思う。

・授業の内容はとても難しくよくわからないことも多くあったが、発表班と司会班をしたときには、人前で話をするのが少なかったのも、よい経験になったのでよかった。

・普段考えられないことが考えられてよかった。難しい用語が出てきてわからないときは先生のサポートがあったので意味を理解できた。授業方式も先生らしい経験ができてよかったです。ありがとうございました。

・教育というのは複雑で難しいと思った。

・教育には様々な教育があり、そのなかに学問中心のカリキュラム、人間中心のカリキュラムがあり、それらはどのようなものであるか、この授業を通してたくさん学べたと思う。難しいこともたくさんあったが、子どもた

ちにとって「教育」とはどのようなものでなければならぬか、やただ教えるだけではなく子どもたちがどのような授業をしたら理解できるようになるかなど、他にも色々興味が持てるようになったことがよかった。

・他の授業は90分間話を聞くことが多いけど、自分たちが授業をすることで、頭に残っていくので、要点などを忘れませんでした。

・今まで教育の基礎について深く考えたことがなかったので、この授業を通してたくさんの教育の基礎を知ることができました。そして授業自体も自分たちで調べてまとめて発表する授業になっていて、ただ授業を聴くのではなく、しっかり学び考えながら授業に取りかかることができました。自分の意見をしっかり言うことの必要さなども考えることのできた授業でした。このような経験はこれから先、必ず役に立つと感じました。

・文章を読みまとめてみる、今まではそのようなことはできなかったが、やっていくにつれて、コツもつかめてきた。また、自分だけでは不明な点も班で相談したり、授業中での質問といった形でわかったりもした。自分の考えだけでは、導けなかったようなことも、他の人と話し合えば導き出せるものもあると気づけたのは大きな財産となった。

・高旗先生の授業は、自分たちで教科書を理解し、授業をしなくてはならないので最初はいやでした。でも、ただ椅子に座って授業を聴いているだけでは、身につかなかったと思うし、自ら知ろうとしなかったと思います。この授業は積極的に参加していけるものでした。

・教育基礎論を受けて、授業の前には教科書を読み理解しておくという習慣が身につきました。教科書を読んで理解していくうちに大切な文や単語がわかるようになってきて、この授業を受けて良かったと思いました。

・私たちが小中高で学習してきた「教育」とは何か、また、「教育」のために構成されたカリキュラムとは。他の国や過去、現在の教育現場を比較することによって、さまざまな教育の本来の意味があるということを感じた。またカリキュラムは教育を受ける者、受けさせる者の目的が一致して、それにあったカリキュラムが行われるのだと感じた。自分で教科書を読み大切なことを発表するのは大切だと思い、また自分の思ったことが言えて楽しいし自分のためになった。

・グループでまとめをして発表する。その他のグループは質問を考える。司会をするというスタイルは一人ひとりが考えるきっかけにもなるしよかったと思う。

・「教育」について今まで自分が学んだことの無いようなことが学べました。「教育」についての知識が身につきました。この授業の形態が、自分たちでまとめて自分たちで発表するというように、学生中心の授業で、とても貴重な力が身についたと思いました。授業の内容は難しいですが、とても重要なことばかりであると思いました。

・文章をまとめること、文章を読み取ることが今まであまり得意じゃなかったのが、今回みんなでまとめることで少しずつできるようになったかなと思います。

・この授業を受けてよかったことは、自分たちで授業をするということです。教科書の内容をクラスのみんなにわかりやすく説明することの難しさ、大変なことを知りました。教育についても学ぶことができたので良かったです。

・3つの班（司会班、発表班、質問班）に分けることによって、全員で授業に参加出来ていてまとまりがあったので良かったです。それに教科書を読み、自分でまとめる能力やみんなにどう発表したらうまく伝わるかなど、普通の授業では経験できないことを学べました。「考える」という力が大学に入って少しずつ身についたように思えます。ありがとうございました。またよろしくお願いします。

・自分たちで授業を進めていくので何がわからないかなどがよくわかり、自ら進んで調べることができるようになった。

・この授業を受けてよかったことは、私が何時も使っていた「教育」という言葉は、とても浅い意味だけの言葉だったということを知れたことです。「教育」という言葉だけでもさまざまなことが含まれていて、深いことだったんだなと思いました。また、授業形式が自分たちで進めるタイプだったので、普通の授業のようにただ受けるだけでなく、自分たちも質問を考え、発表班だったら、考えて発表したり、質問に答えるので、他より考えが深まったのではないかと思います。

・すべて自分たちで考えて授業を行うことは、やる気も出てくるし助け合おうという意識が出てくるのでよいこ

とだと思った。

・予習する習慣がついたし、授業を進める力、人前に立って意見を言ったり説明する力がついた。教師として必要で大切な力なので、これからに生かしたい。

・最初は、教科書も文字ばかりだし、1つ1つの単語や文章の意味も難しく思っていたけれどだんだん自分の中で解釈できるようになるとおもしろく感じるようになった。授業形式も発表、司会、質問といったように、班ごとに役割があり、これからの将来にも役立つような気がした。半年間ありがとうございました。

・自分たちで発表、司会をしながらの授業はとてもおもしろかったです。教科書の内容からグループで考察し、意見を出し合うのは、とても新鮮でした。聴くだけでない学習の取り組みを知れてよかったです。

・この授業を受けて、文章の読み方、読みすすめ方が変わった。しっかり深く読み進めることができるようになった。論理的に考え、説明する能力が身についたと思う。

・みんなの前に出て司会をしたり、発表をしたりとなれてないので恥ずかしかったし、難しかったけど、カリキュラムや教育についてたくさんのことを学べた。みんなの前での発表もいつかは経験することだから、今のうちに練習しているみたいでとても将来役に立つと思えました。先生もこわいと思っていたけどやさしかった。新たな学習や発見がたくさんあってよかったです。

・司会班、発表班、質問班に別れて学習することで司会班は司会をする能力（人をまとめること）、発表班は自分たちの考えをいかに正確にわかりやすく伝えようとするかをがんばるし、質問班は自分たちの疑問をぶつけること、それに対する答えを得て理解することをそれぞれ学んだ。

・今まで「教育」や「カリキュラム」という言葉は聞いたことがあったけど、どのようなものかはしらなかった。この授業を受けて、それらがどういうものなのか学校や授業の内容にどのように影響しているかということを知ることができてよかった。また自分たちで授業をすることでどうやればわかりやすく伝わるかや説明の仕方なども実際に体験しながら学ぶことができてよかった。

・教育基礎論の授業は学生が主体になっていた。先生が授業をするのではなく私たち学生自らが司会をし学生自

らが発表、質問しみんなで学んでいく授業だったのでとてもわかりやすかった。また、授業をすることがこんなにも難しいことだということが学べた。自分にとってとてもよい経験ができたと思う。半年間ありがとうございました。

・この授業のような形の授業は初めて受けたのでおもしろかったです。学生が主体になって行う形式は珍しくとても参考になりました。この授業である程度教科書のどこが重要かわかったような気がします。

・みんなの前で教科書の内容を説明することは、自分自身も内容をしっかり理解しておかないといけないので教科書をしっかり読みきかけができました。また、班で内容を話し合う、自分の意見を出し合う点でも力になる授業だと思いました。内容は難しいけれど、しっかり考えることができた授業だなと思いました。わかりやすく説明する難しさも学ぶことができたと思います。

・初めて見る語句ばかりで、とても難しかったですが、やってる感じがとても感じられる授業でした。また学生がテキストを読んでどう解釈しているか、お互い発表していくことでわかったと思います。

・前よりも教科書を読んで自分でまとめられるようになった。どのようにすればよりスムーズに授業を進められるかがわかった。前よりも物事（内容）を深く考えられるようになった。

・将来自分が先生になる上でどうやったらうまく進行できるかなど少しヒントがもたらされた感じがしました。自分たちでほぼ授業を進めていくこの授業は本当になかなかない機会の良い経験になりました。

・教科書の要点を探し、まとめる癖がつかえました。今までは全体を何となく見ていただけでしたが、この授業を通して要点の見つけ方がわかってこれたのでよかったです。

・はじめは、前に出たり発表したり当てられたりして一番いやな授業だった。けど、だんだん慣れてきて教科書をまとめて黒板に書いたり、質問を考えたりするのが簡単になってきたので、そこが一番よかったと思う。

・教育をする上で知っておかなければならない基礎的なことについていろいろな面から勉強することができた。自分がまだまだ知識が少ないということがわかってよかったです。

・ただ先生の講義を聴くのではなく、自分たちで教科書の内容を少しずつ理解し自分たちで授業を進めることで、人前で発表をすることの大切さを知れたことです。

・今まで教科書を読んで自分で解釈して発表するという授業法はやったことがなかったので、最初は難しく大変でしたが、やるにつれて内容が教科書を読むだけよりしっかり理解できるようになったのでよかったと思います。

・この授業を受けてよかったことは、教科カリキュラムや経験カリキュラムなどのカリキュラムについてや教育にたずさわったデューイなどの人物や教育について学べたことがよかった。また授業ではグループごとに学生が黒板にまとめたものを発表して司会班が司会して授業を進めていき、わからないところは質問するという授業の進行がよかった。

以上は「教育基礎論」の定期試験を受験した全員の授業への感想である。「受講してよかったこと」は大きくは2つの内容に分けられる。

第1は、教育についての今まで知らなかった深い考え方（教育の思想）に出会って、考えたこと。さらにテキストを読んで理解することができるようになった。教育に関する専門用語にふれた。など、内容に関わる面である。

第2は、学習形態、すなわち、学生中心の授業形態であった。司会や発表や質問、それへの応答が今後に役立つであろう体験になったこと。教育実習の事前訓練としてやるのだという、この授業の趣旨説明は意外に徹底しており肯定的に受け止められていたように思われる。

自由記述を読んで、授業の「よかったところ」を上手に表現しようとしたあとが読み取れる。授業評価としてこの課題を出したことの教育的効果とこの評価方法自体に対する評価は二分される。肯定的な評価と、他方「やらせの」で評価になっていないと非難する向きもあるかも知れない。それは授業論、評価論の違いである。

なお、大学が全授業に対して行う「学生による授業評価アンケート」において、別の同様な形態で展開した教職科目の授業に対して「授業料ばったくり授業」と書いた学生が1名いた。何時間か欠席して、初めて出席した授業で自分が質問班に属していて、質問をするように司

会者から指名され面くらった学生によるものかも知れない。講義形態の変容の傍証として貴重な記述ではあると思っている。（付記、写真の掲載に同意された受講生のみなさんと同意の手續の労をとって下さった担任の木内菜保子先生に感謝の意を表します。）

参 考 文 献

高旗正人『自主協同学習論』明治図書，昭和53年。

高旗正人編著『講座 自主協同学習（全3巻）』明治図書出版，昭和56年。

1) 自主協同の学習理論

2) 自主協同の学習過程

3) 自主協同学習の導入と測定

高旗正人編著『教育実践の測定研究』東洋館出版，平成11年。

高旗正人著『「学習する集団」の理論』西日本出版，平成15年。

高旗正人「自主協同学習の開発と展開」中国学園紀要，第8号，2009年（平成21年），127-135頁。

